

遺跡番号	遺跡名	時代	所在地	遺跡の種類	備考
41-207	大石原	中世	1560 大石原	遺跡	
42-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
43-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
44-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
45-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
46-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
47-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
48-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
49-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
50-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
51-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
52-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
53-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
54-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
55-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
56-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
57-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
58-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
59-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
60-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
61-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
62-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
63-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
64-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
65-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
66-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
67-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
68-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
69-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
70-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
71-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
72-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
73-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
74-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
75-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
76-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
77-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
78-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
79-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
80-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
81-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
82-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
83-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
84-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
85-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
86-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
87-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
88-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
89-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
90-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
91-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
92-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
93-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
94-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
95-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
96-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
97-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
98-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
99-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	
100-1	北山	中世	1560 北山	遺跡	

地形分類図及び遺跡分布図

栗田 I・II 遺跡

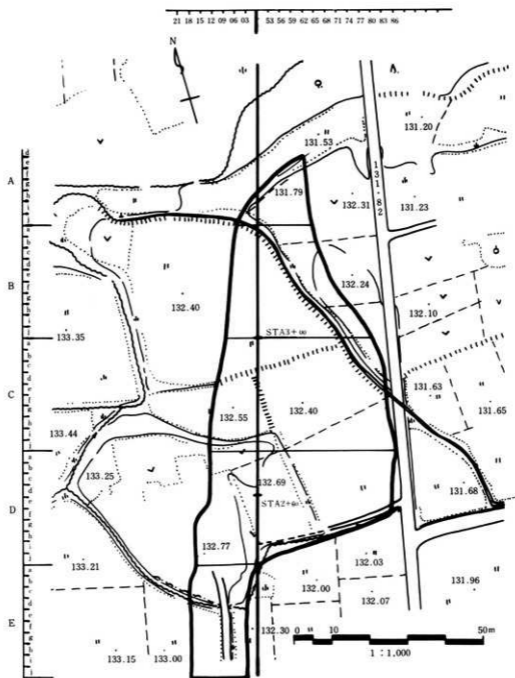
遺跡名：栗田 I・II (略号 K T I・II78)

遺跡所在地：岩手県紫波郡紫波町上平沢字栗田41の138の1

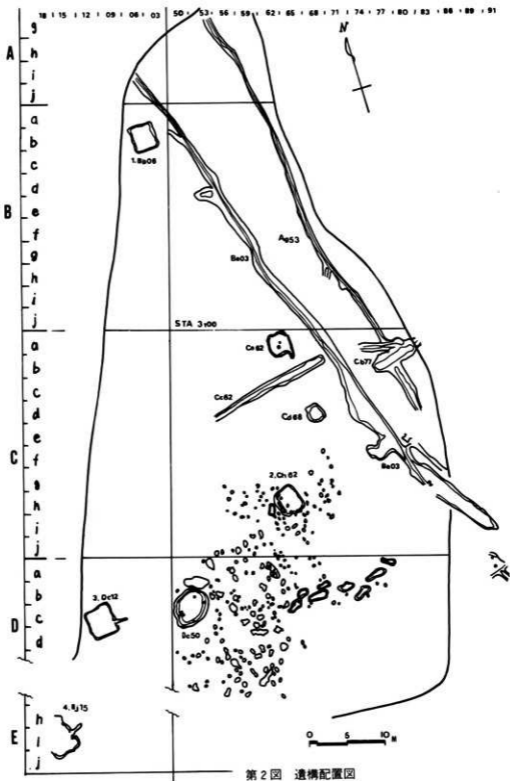
調査期間：昭和53年4月14日～7月31日

調査面積：I - 1360㎡ II - 2760㎡ 計4120㎡

発掘面積：I - 1360㎡ II - 2760㎡ 計4120㎡



第1図 栗田I・II遺跡地図(工事以前の地図)



第2図 遺構配置図

I 位置と立地

当遺跡は、紫波町役場の西方約4.5kmのところに位置し、東に緩く傾斜する低位段丘面にある。遺跡の北及び南は一段高く、それぞれに上平沢新田遺跡、栗田Ⅲ遺跡が載っている。

当遺跡の現状は水田・畑地・宅地であった。すぐ南側は湿地を埋立て水田にしており、北側は小沢を隔てて緩傾斜地に続く。調査は開業中の東北縦貫高速自動車道へのインターチェンジ取付部について行なった。調査地域の北西部より中央・南東にかけて用水路があるが、この用水路は自然地形を利用して設けられた旧水路上に新たに設けられたと思われるものである。昭和40年以前の耕地整理等による削平及び盛土で自然地形は損なわれているが、僅かに栗田Ⅰ遺跡より東に延びる部分的な平場状の高まりが残存し、それらに付随し取り囲む形で水路が見られる。平場状の高まりの西側は高速自動車道本線によって被われている。伝承及び旧地名として遺跡南西方向に鬼清水と呼ばれる所があり湧水地及び湿地であったという。事実工事ともなう開穿では、高速自動車道本線西側に多量の腐植泥質土が露出し湧水等も見られた。又本線下・旧水路交点付近及び栗田Ⅰ遺跡の載る平場中央部付近の湧水等により地下水脈の存在も認められる。

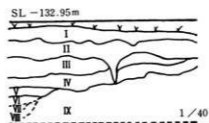
II 調査に於ける基準点

本遺跡に於いては、紫波 Interchange 平面図（日本道路公団）に示される STA3+00(茶杭)を原点とし、これと STA3+60(青杭)を結ぶ線を中軸線とした。この中軸線は真北から約16°東の方向を向いている。

III 基本層序

イ、基本層序 当遺跡の基本層序は第3図に示すごとくである。調査区域のDE区西側にては第3層上面が遺構検出面である。他は開田削平後の整地盛土があり第4層面以下が検出面となる。又各層にはうねりがあり同一平面での広がりは認められない。

ロ、遺物包含層 第一層・第二層に縄文時代から近代までの遺物の出土が見られる。これら2層は同一層の深度変化を示すものであるが、縄文遺物は現水路（ほぼ南北に流下）東側に多いという傾向も見られる。C/D56よりC/D80地点の南側の範囲はほぼ包含層を欠き、東側程厚く(約70cm)土盛がされてあった。



- I-暗褐色シルト質腐植土(表土層)「7.5YR 3/4」
 II-褐色シルト質 腐植土 「7.5YR 4/3」
 III-明褐色土(極細粒砂、木根攪乱)「7.5YR 5/6」
 IV-黄橙色土(シルト質 粘質) 「7.5YR 7/8」
 V-橙 色土(細粒砂質) 「7.5YR 6/6」
 VI-橙 色土(シルト質) 「7.5YR 6/8」
 VII-橙 色砂質土(粗粒砂) 「 # #」
 VIII- # (細粒砂) 「 # #」
 IX-砂礫層(砂+大礫)

第3図 基本層序

IV 検出された遺構と遺物

主な遺構は、竪穴住居跡4棟、竪穴状遺構3基、焼土遺構9基、掘立柱建物跡と見られる柱穴様土壌群、溝3条、その他である。

1. 遺物包含層出土遺物

イ. 縄文時代遺物（第4図、第1表、写真11図）

縄文式土器

出土破片数は800点、出土位置毎の合計推定数は100種、その内には完全に復元できたもの0点、採拓記録を行なったもの25点である。主なもの20点は一覧表（第1表）にて示してあるが、それらの内特徴あるものについては以下の通りである。

図の1～7は斜行縄文が回転施文されている粗製土器である。これらの器形は大半が深鉢型である。図1については内傾気味の口縁を有するものと推定される。8～9は底部のみの破片で上部がどの様になるのか不明のものである。10は体下部より底部まで接合する。一覧表に示した通り胎土は砂質であるが硬堅である。織物様文様の類別を検索したがまだ見当らず、体上部の文様がどの様になるのか不明である。11～20は地文以外に加飾されている破片で、1部推定復元が出来るものを含む。11は口縁部に文様帯を有する、3突起山形口縁のものである。頂部より蛇行隆帯文が降下し5cm下の横位区画の刺突隆帯に連らなる。底部までは地文のみが施されると推定される。12は波状口縁をなし頂部より両側に刺突を有する降帯が降下する。この口縁部は磨きでなく地文が施されている。13は胎土・施文上より明確な接合点を持たぬが前述の12に連らなると思われる。この土器も文様帯は口縁部に限られる。14は大型の鉢の

表1	器種番号	発掘層	出土位置	器形	部位	色調	土性	内面(調整等)	外面(調整・施文等)	備考(推定値・等)
1	4-1	11-1	Ba53	鉢	口縁	褐色	砂粒目立つ	磨き	L-10 斜行縄文	口縁部丸味を帯び内傾気味
2	4-2	11-2	Bb03	〇・鉢	浅黄褐色	細粒含む	*	L-10 斜行縄文	口縁部	(口縁24.0)
3	4-3	11-3	Bb53	〇・鉢	浅赤褐色	砂粒	*	L-10 太目の縄文	* 他に破片あり	(口縁15.0)
4	4-4	11-4	Bb53	〇・底	浅黄褐色	細粒含む	*	L-10 地文のみ		(口縁20.5)
5	4-5	11-5	Ba56	〇・鉢	黄褐色	*	(横方向)磨き	R-17 斜行縄文	内面磨きでいぬい	(口縁21.0)
6	4-6	11-6	Ba- 子	〇・鉢	黄褐色	砂粒含む	磨き	L-10 斜行隆帯文	内面に黒色部あり	
7	4-7	11-7	Bb03	*	褐色	細粒含む	磨き	L-10 地文のみ		(口縁20.0)
8	4-8	11-8	Bb50 (*)	底部	浅黄褐色	石英含む	*	木葉文(一枚の葉)	内面に灰層、木葉物あり	(底径13.5)
9	4-9		Bb53 (*)	*	褐色	*	*	葉状葉文		(底径10.8)
10	4-10	11-10	Bb42	底・体	浅黄褐色	*	磨き	* 斜引きの隆文	織物様の胎土を示す	(底径10.3)
11	4-11	11-11	Ba52	鉢	口(底)	黄土褐色	砂含む(細粒?)	磨き良好	隆帯磨き刺突、成山山形(一対?)	磨きで口縁、黄褐色調を帯び内傾気味、底径約2.5cm(口縁15.0)
12	4-12	11-12	Bb03	〇・鉢	黄褐色	細粒含む	磨き	隆帯刺突(竹管)、R-17磨き	内傾気味、隆帯の垂下不明	
13	4-13	11-13	Bb03	〇(無部)	褐色	右側目立つ	*	横位隆帯下凸工機内傾気味	地文L-10 地味は良好	
14	4-14	11-14	Ba56 (Ba56)	〇・鉢	黄褐色	*(三層状)	良好	縦・横位隆帯区画、沈線刺突	中央口縁、沈線内竹管刺突多用	
15	4-15	11-15	Ba56 (Ba56)	*	*	*	*	沈線区画竹管刺突	14に類似(縦位隆帯内に配置されるか?)	
16	4-16	11-16	Ba56	〇(口・底)	浅黄褐色	石英・砂粒	*	磨き文一部斜行地文L-10	底径約2.5cm(口縁15.0)底径約2.0cm	
17	4-17	11-17	Ba50	〇(口縁)	*	*	*	隆帯刺突	磨き口縁、地文不明	底径約1.5cm
18	4-18	11-18	Ba65	〇・鉢	*	*	*	*	* 底径以下隆帯	17に類似
19	4-19	11-19	Bb03	*	褐色	*	刺突	底径約1.5cm	磨き口縁、小破片	
20	4-20	11-20	D150	*	褐色	*	黒皮部あり	複合口縁隆帯上上に沈線施文	R-17磨き。内傾気味	
21	4-21		Bf06	* 下部部	浅黄褐色	細粒含む	磨き	L-10の地文のみ	地文のみ平口	(底径14.0)

口縁の一部である。広中の口縁の降下する隆帯を中心に刺突と沈線をもって加飾している。隆帯下部近くの両側にはそれらによる円文が配されているが磨耗等により細部は不明である。口縁部文様帯は刺突隆帯文により横位に画される。15は14と類似の加飾手法を持つものであるが同一物とは判定し難い。16は破片としては一応口縁部より底部までそろっているが、体部下だけが接合する。磨消縄文と、3点斜圧を施された貼付文の組合せである。口縁部は磨いてあり2cm程で横沈線で体部文様と画されている。この横位区画沈線上に3点斜圧貼付文が重ねられそれより磨消文が降下している。この磨消文は縦位の3点斜圧貼付文で終り横位沈線で連らなっている。磨消文の配置は横位区画沈線下3cm程の所より始まるものと交互でなされる。17は18と同一個体と思われ、波状を呈し隆帯と沈線を加飾された磨きの口縁である。19は刺突を有する大型のボタン状貼付文の加飾されたものである。磨かれているが波状をなすか否か不明である。20は表土下部D区の柱穴様土壌上端より出土したものである。

石器 (第5図・第2表・写真12図)

石鏃-出土数は一点と少い。虫喰い状の風化痕が見られるが極めて薄い作りである。

打製石斧-緑色凝灰岩製の荒ばい作りのものである。

石匙-粗雑な作りである。先端に自然面を残す。

不定形石器

1)は楔状の形態で、調整痕を有する。使用痕は上端鋭角部にも見られる。6)は調整技法がほとんど確認出来ない。刃部はほぼ全周に使用痕が見られる。時期区分上は問題をもつ石器である。

7)は打製石斧の柄部と刃部両端が欠損したものかとも思われるが、図示上端(先端部)にも使用痕が見られる等、区分上問題を有するものである。8)も6)同様調整痕はほとんど見られない断面三角形の石器である。上端(基部)を除いて先端及び両側端に著しい使用痕が見られる。

種別	登録番号	図録番号	写真番号	出土地点	出土層位	最大径 (cm)			重量 (g)	材質	備考
						縦	横	厚さ			
石鏃	1	S-1	12-1	Bf65	II	1.6	1.4	0.3	0.5	玉髄	虫喰い状
	1	S-13	12-13	Be56 (備)	砂	13.8	9.2	1.3	167.6	緑色凝灰岩	打製
	1	S-11	12-11	Ce77 (備)	I	2.3	2.8	0.8	4.0	チャート	類型
不定形	1	S-8	12-8	Bh03	II	2.5	1.8	1.1	4.6	性質不明	
	2	—	—	Ce77 (備)	I	2.7	2.5	1.3	7.8	玉髄	
	3	—	—	*	*	1.2	1.7	0.7	1.0	ダンソク石	
	4	—	—	Cj43	II	1.0	1.9	0.9	1.3	*	使用痕なし
	5	—	—	Cj30	燧石	4.7	3.1	0.7	6.9	凝灰岩	
石	6	S-9	12-9	De50	I	5.9	3.0	1.3	23.5	ホーレンフェルス	
	7	S-12	12-12	Be06	II	7.9	6.4	1.4	97.0	*	石斧欠損品か
	8	S-5	12-5	DfE	真珠	5.4	4.0	1.9	29.0	性質不明	
	1	S-4	12-4	Be03	II	3.3	2.1	0.6	4.2	性質不明	石匙の半製品?
片	2	—	—	BfE	*	1.8	2.4	0.6	2.5	燧石	使用痕
	3	S-6	12-6	*	*	1.9	3.3	1.4	6.75	性質不明	
	4	S-2	12-2	*	*	1.7	1.9	0.3	1.1	ダンソク石	
	5	S-7	12-7	*	*	3.0	3.2	0.6	6.5	性質不明	
	6	—	—	Be56	*	3.4	4.1	2.9	15.7	石英 (備石)	
	7	S-3	12-3	Bf56	*	1.8	2.2	0.5	1.75	ダンソク石	
	8	—	—	*	*	4.7	2.7	2.0	19.5	黒曜石	
	9	S-10	12-10	Bj53		2.6	3.5	0.7	6.4	性質不明	



第5圖 石製品

1-4·6·8 S=片 他はS=片

時期区分等問題を有する石器である。

制片石器 (総数 9 点、図示 5 点)

1) は上端に使用による抉り込みが見られる。他部の使用痕は明瞭ではない。上端部には柄成型の為かと思われる調整を施しかけた痕がある。 3) は上部に自然面が残っている。横型で先端部は折れている。使用痕は自然面の残っている側辺先端に見られる。 4) は爪状の小剥片でほぼ全周にわたり使用痕が見られるが円形辺部に明瞭なものが残っている。 5) は先端部を除いて使用痕が認められるが特に抉り込みによるものがある。断面は側線よりはずれた部分にて一方がより外面に膨らみ、下端はより薄くなる。 7) は蛋白石製で上端肥厚部を除いて使用痕が見られる。部分的に調整を施し、石鏃等の製作を意図したようにも見られる。 9) は先端部及び柄部と思われる所が欠損している。先端部に連なる 2 側線には使用痕が認められる。

ロ. 古代以降の遺物 (第 6 図、第 3 表)

須恵器

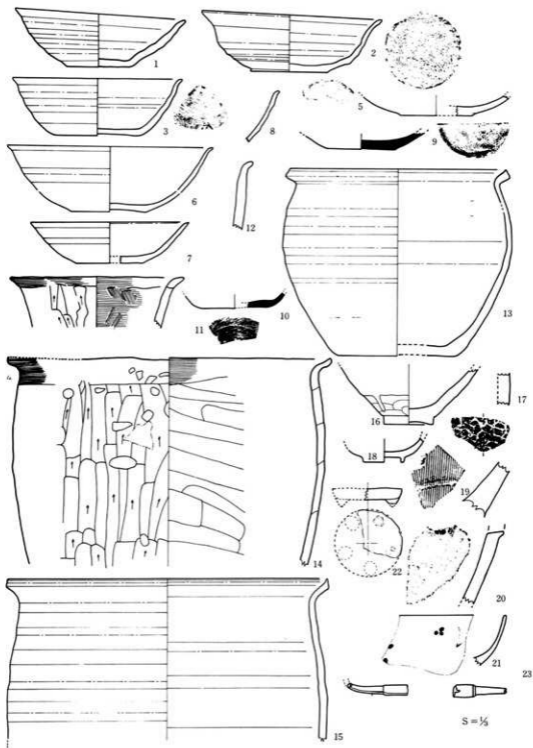
出土位置が南北大溝の周辺のみ集中する。ある意味ではこの溝にともなう遺物と見る必要もあり、個々については溝の出土物として後述するのでここでは項目のみにとどめる。

土師器

南北大溝の周辺に多い訳であるが、他の遺構にも出土し又その周辺にもあるのでそれぞれの遺構との関連が考えられる。

(環) 1) は厚手で底径が小さい。形が歪み器高は中間的な値を示す。 2) は薄手な作りであ

調査区	図番号	写真番号	出土位置	法 量 (cm)			口縁部 形 態	底 部 形 態	成 形 技 法	底部切 削技法	胎土 含有物	調 整		焼 成 色 良 否	備 考 (注記)		
				口径	底径	器高						外 面	内 面				
土	1	6-1	13-1	D625L	13.6	5.0	(4.4)	外縁	平流	口クロ	回転糸切	糊焼	底部の一部	口クロ	●	赤褐色、器底に口クロ、口外縁	
	2	6-2	13-2	*	14.5	6.2	(4.5)	外反	平流	*	*	炭焼	口クロ	口クロ	●	赤褐色、(器底)に口外縁	
	3	6-3	13-3	*	13.6	(6.6)	(4.6)	外反気味	*	*	石灰	*	*	*	●	赤褐色、(器底)に口外縁	
	4	-	13-4	*	(12.4)			(口外縁)	-	*	-	*	*	*	●	赤褐色、器底、器蓋	
土	5	-	-	*	(13.8)	(7.4)	(4.2)	外反気味	(-)	-	-	糊砂	*	*	●	赤褐色	
	6	4-5	13-5	D259		(5.8)		平流	(*)	回転糸切	*	*	*	●	赤褐色		
	7	4-6	13-6	Ej121L	16.4	5.9	(5.2)	外反気味	*	口クロ	*	糊砂	粗	*	●	赤褐色、口外縁に口外縁	
	8	4-7	13-7	*	(12.6)	5.3	(3.3)	外縁	*	*	*	糊砂	粗	*	●	赤褐色	
須恵器	9	4-8	13-8	*	14.4			外反気味	*	-	-	糊砂	粗	*	●	赤褐色、口外縁に口外縁	
	1	6-9	13-9	B406	-	5.4	-	平流	*	回転糸切	粘板石	曹 曹	曹	*	●	還元	
土	2	6-10	D403	-	5.4	-	-	*	*	*	不明	糊砂	曹	曹	●	灰色、硬質、調整痕	
	1	6-11	13-11	Ej122L	14.0			外反	-	口クロ	-	糊焼	粗	*	●	灰白色、全体の1/3に口外縁	
	2	6-12	13-12	Fg123L	19.2			*	-	*	*	*	*	*	●	赤褐色、全体の1/3に口外縁	
	3	6-13	13-13	*	(26.0)			*	-	*	*	曹	口クロ	*	●	黄褐色、口外縁に口外縁	
土	4	6-14	13-14	*	25.6	(10.4)		外縁	平流	(口クロ)	(無)	*	口クロ	*	●	赤褐色、口外縁に口外縁	
	5	6-15	13-15	*	(17.3)	(9.3)	(15.0)	*	*	(*)	(赤焼)	*	口クロ、底面	*	●	灰白色、調整痕	
	1	6-16	13-16	B406		(4.0)		(口外縁)	口クロ	曹	曹	曹	曹	曹	●	灰白色、調整痕	
	2	6-17	13-17	Ba-d	-	-	-	-	-	-	-	糊砂	曹	(スタンプ)	(割離)	●	曹
	3	6-18	13-18	D612	-	(3.2)	-	赤流	口クロ	(赤焼)	*	*	*	口クロ	●	内面口外縁に口外縁	
土	4	6-19	13-19	Dc53	-	-	-	-	-	-	糊砂	良	口クロ	●	良好状態		
	5	6-20	13-20	D603	-	-	-	-	-	-	糊砂	粗	(割離)	(口クロ無)	●	調整痕、口外縁に口外縁	
	6	6-21	13-21	Ej06	(10.5)			底口	-	*	-	糊焼	良	口クロ	●	還元	
土	7	6-22	13-22	Ba36	(5.4)	(4.0)	(1.5)	-	-	-	-	糊焼	粗	-	●	調整痕、口外縁に口外縁	



第6図 古代以降の遺物（包含層）

る。見た感じにては器形の歪みはそんなに感じられない。朱様物質が見られるが酸化物かもしれない。墨書は破損部にて判読できない。3)は寸位の破片で反転図化してある。全体的には厚手である。4)は寸の破片である。残存部は縁に段を形成するような加工痕が見られ、非対称形の片口様形態をなす。5)は寸位の破片で2)と同様薄手、口縁は開き気味、高台部が剥離した可能性も考えられる。6)は合成反転図化に際しての推定値に問題が残る。胎土が粗ゆえか保存状況は不良、湿地に出土したのもその一因と思われる。7)は赤焼系土師器に類似する。含有物は粗粒であり基質も軟弱である。8)は6)に類似しているが口唇部の外反が強い。

(壺) 1)は小型で口唇部が波打つなど、粗雑な仕上がりになっている。2)は1)と同じような仕上がりで、後出の3)類似破片である。受熱によるのか、外面から口縁内面にかけ橙色を呈し器胎中程まで同色である。3)の口縁は外反又は水平である。削りは体下部より上部方向に行なわれている。4)はロクロ調整のもので複合口縁的な外部への張り出しと内外に沈線様段が付けられている。巻上げ痕巾は2.0~2.5cmである。炭質様付着物が見られる。5)は底より口縁まで接合する。形態はロクロにより整えられているが、胎土粗で下部器磨耗損傷が激しい。

陶磁器

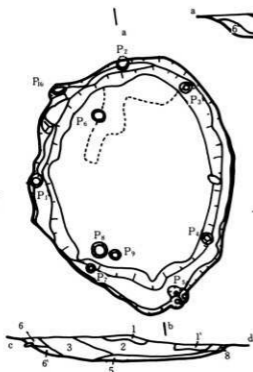
出土点数もそれ程多くなく、現代の使用品も見られる。

1)は鉄釉天目茶碗の底体下部寸程の破片である。底外面は糸底の形をとらないが内部へ幾分の削り込みが見られる。畳付外部は削り取られ段をなす。外面腰部下底までの寸の所へ釉溜が見られる。釉の基調は赤黒色(Hue2.5YR⁴)であるが釉溜りの露胎との境界部は鈍赤褐色(Hue2.5YR⁴)に近い色を呈している。この境界部と同様の色調を持つ流下斑点と微細な皺状網が釉表面に見られる。内面は見込みが広く釉により器内底面は美しい曲線を描いている。釉厚は1mm強、釉溜部は1.5mm位である。胎土は褐灰色(Hue10YR⁴)を呈し空隙は見られない位焼き締められている。近隣の柳田遺跡の出土物Na10・24が色々な点で似ているが、産地の特定は出来ない。胎土分析結果について巻末に記しておく。2)は火鉢の体部片と思われる。施釉もなく壁面は軟かい。亀甲模様は明確でない。3)は小型の茶碗で器壁は厚目であるが、高台は全体的に薄く仕上げられている。4)は播鉢底部で底部の境まで鉄釉様のものがかかっている。放射状の描溝は磨耗していないが、重ね焼き痕と思われる列断と釉溜りが見られる。5)は角鉢の破片かと思われる。6)は磁器片で湯呑み茶碗の一部である。7)は焼台で、三脚を持ち、胎土に砂礫を多く含む。

金属製品

(古銭) 表採された洪武通宝の銅銭で諸元は遺構関連出土物と同一の表に記してある。

(鉄製品) 踏鉄-Ba50田の代盛土内より出土のもので近くに馬(大歯部)様遺体が見られた。資子-Eg15 I層下部よりの出土で、径12.8cm、厚さ6mm 1.4cm角の格子である。千歯扱の歯



土層註記

1. 黒褐色 (10YR 3/5) 腐植土層 (炭灰土炭化物等少し含む)
- 1'. 黒褐色 (#) # 礫だけ含む
2. " " " (粘土をブロック状に含む)
3. " (10YR 3/5) # (粘土礫 遺物を若干含む)
4. " (# 5/5) # (シルト質(砂質に近い))
5. 黒色 (# 5/5) # (礫シルト、炭化物若干含む)
6. " (# 5/5) # (礫含む、シルト遺物若干含む)
- 6'. " (#) # (礫を若干含む)
7. " (#) # (砂質シルト質土混入)
8. " (#) # (砂礫を多く含む)

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
上層深cm	15×22	25×22	27×22	28×27	28×27	28×27	29×28	29×28	22×28	44×28
下層深cm	18×27	28×25	25×22	18×18	18×18	20×18	20×11	28×25	22×18	40×25
深さcm	32	32	14	36	33	25	23	27	17	34

第7図 竪穴式住居跡(Dc50)

— E15II層下部よりの出土で長さ15.1cm、巾2.3cm、厚さ0.5cm、楔状の平面形である。

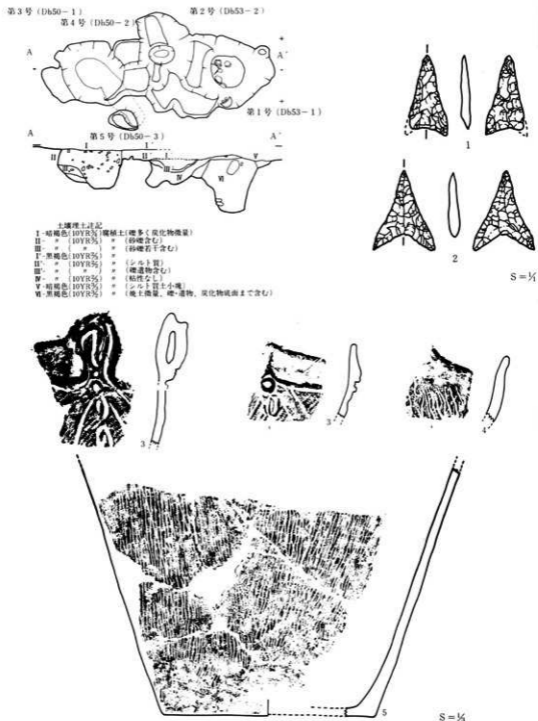
2 縄文時代の遺構と遺物

竪穴式住居跡 (Dc50) (第7図・第4表)

〔遺構〕〔平面形・規模・方位等〕長軸長5.4m、短軸長4.2mのほぼ楕円形を呈する。壁高は約40cmであるが壁は明確に立たず床面に緩傾斜と一段をもつて至る。長軸の方位は北より40°東に偏っている。

〔床面・周溝・柱穴・埋土等〕貼り床とか周溝などは検出出来ず、中央部は砂礫層、南側と北東部は明褐色シルト質土に続く。柱穴様の土塊としては合計10個所あり、壁の上端と下端の間点に6、床面の北側に1、西側に2、壁の北側上端に1である。これらの埋土は住居跡埋土

第4表	出土位置	形状	部位	色調	土性	内訳(調査等)	外訳(調査・出土等)	備考(層位等)	
Dc50 竪穴式住居跡出土物	1	Q ₁ 2層	鉢	底	原色	砂粒	磁	無地で、底(炭灰層炭化物)	(遺跡30.4mに番号1Aより長さ)35m
	2	Q ₁ 2層	"	鉢	淡黄褐色	"	"	(L-1) 縄文不明	厚さ0.4m地に1片
	3	"	"	"	鈍褐色	細砂多い	骨	木目縞縞未文	2片 番号1号(D503-1)土層21; 短板
	4	Q ₁ (NO2)	"	"	暗灰色	粗砂	磁	洗刷(試面)	番号1号(D503-1)土層21; 短板
	5	"(NO1)	鉢	"	淡黄褐色	砂粒	骨	ロココ無地で	磨減片 土層跡
	6	Q ₁ 2層	鉢	"	黄褐色	粗砂	磁	無地で	(L-1) 縄文不明
	7	Q ₁ 2層	高台付	鉢・底	鈍褐色	砂粒	骨	内黒地埋	高台内埋無地で
	8	Q ₁ 床面	鉢	底	褐色	"	"	無地で	磨減片
	9	Q ₁ ・2層	"	鉢	"	"	"	"	磨減片 縄文11片
	10	Q ₁ 3層上端	"	鉢・底	"	"	"	"	磨減片 縄文5片 土層1片



第8图 第1号 (Db53-1) ~ 第5号 (Db50-3) 土壤及び出土物

第5表	図版番号	写真版番号	出土位置	形制	部位	色調	土性	内面(調整等)	外面(調整施文等)	備考(鑑定・出)
縄文	1	B-3	4-1	第1号(Db53-1)Q	縁口縁	灰褐色	雲母石英	貫り良好	耳状把手隆背区画磨消沈麻文	把手部は背で地手磨に沈み(口縁B)
	2	B-4	4-2	×	Q	×	純赤褐色	×	磨消(口縁磨きのA?) 磨消文(裏面)	縁部良好後縁部下の文様不明
	3	B-5	4-2	×	×	成部	灰黄褐色	×	磨消	本磨消。しー頁の暗い磨消文

第6表	番号	図版番号	写真版番号	出土地点	層位	(cm)			重量g	材	質	備	考
						縦	横	厚さ					
石頭	1	B-1	4-4	第1号(Db53-1)	第	2.1	1.1	0.2	0.3	玉	磨	欠損	Q
	2	B-2	4-5	×	第	2.1	1.6	0.3	0.4	地	質	磨	ちりめんじみ

の6・7層と同一であるが、中には炭化物を含むものもある。

〔遺物〕 縄文片が大半を占め計28片である。後世の攪乱による紛ざれ込みと見られる3片の土師器の破片もある。縄文片のうち3・4)は他遺構(Db53pit)の出土物と類似性がある。又6)はQ₂2層とQ₂2層の接合片である。半数以上は磨減片であり、床面出土のものも同様で唯一のものといえ遺構年代確定資料としては不十分なものである。

土壌 (第8図、第5、6表)

前述の遺構の北側に大小合せて5つの土壌が確認されたが出土物等より縄文時代以降のものを含む。

第一号土壌 (Db53-1)

〔遺構〕〔平面形・規模等〕 検出面にては不整形であるが下部程円形に近い。他の土壌と近接しており平面形の境界はとらえにくい。上端東西長約1.30m、南北長約1.0m、中端は0.85m・0.75m、下端は0.52m・0.50mとなる。深さは0.95mである。検出面上の土器片は黒斑を有する体部であるが接合関係がない。

〔埋土〕 黒褐色腐植土が大半であるが9層に細分出来る。その内の6層が大半を占め、前述の土器片の他に炭化物・焼土・礫等を多く含む。

〔遺物〕 2)は口縁部小破片である。波状口縁部の一部であるが磨きのみと思われる。3)は底体部接合出来た破片で細い捺糸文を施こしてある。胎土等の色調は2)とは異なるが同一個体の可能性もある。1)は耳状の把手様装飾の施された口縁片である。波状口縁のみの装飾をもつものも同時に出土しており、耳状の装飾部と交互又は、ある間隔を持って配置された同一個体と思われる。石鏃は完形品1・欠損品1がそれぞれ出土している。

第二号土壌 (Db53-2)

〔遺構〕〔平面形・規模等〕 上端は第4号(Db50-2)と西側において接し不整形で、中端は北側が球状をなす南北方向に長い円、下端は中端球状部がそのまま直下した円形となっている。上端径の最長部1.0m、中端長軸長0.8m・短軸約0.3m、下端長軸0.25m・短軸0.10mである。深さは上・中端間0.40m、中下端間0.10mである。

〔埋土〕 第1号と異なり暗褐色土が大半を占め、礫も多く含む。

第3号土壌 (Db50-1)

〔遺構〕〔平面形・規模〕第4号 (Db50-2) と接し、第2号 (Db53-2) と連らなる。上端はほぼ円形を呈する。下端は中央の円形部が南東方向へ延び第5号 (Db50-3) とつながる。上端径約1m、下端径約0.5m、下端奥行0.85m、深さ約0.65mである。

第4号土壌 (Db50-2)

〔遺構〕〔平面形・規模〕前述の通り、2つの土壌の中間にある。平面形は8字形に近く、二段階に底面を形成している。一段目径約0.4m、二段目約0.5mで深さはそれぞれ0.1mである。

第5号土壌 (Db50-3)

〔遺構〕〔平面形・規模〕上端は半円形で、中端に平坦面を持つ、下端は第3号 (Db50-1) につながる。上端径約0.4m、深さは約0.5mである。

以上の土壌の重複関係は不明である。土壌の形状・埋土状況等より第4号 (Db50-2) が一番新しく、第1号 (Db53-1) より第2号 (Db53-2) が新しく、第2号と3号 (Db50-1) では第3号が新しいことも考えられる。これらの時間間隔・機能についても不明な点は多い。

3 古代以降の遺構と遺物

1) 竪穴式住居跡

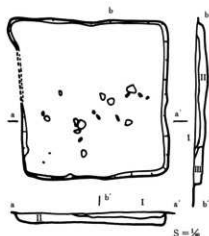
第1号 (Bb06) 住居跡 (第9図、第7表)

〔遺構〕〔平面形・規模・カマド・方位〕一辺約3mの方形であり深さは約22cmの残存を見せている。カマドや炉の施設は認められないが、薄い焼土の広がりか西壁側の中央寄りの床面上に見られた。壁はほぼ東西南北に面している。

〔床面・周溝・柱穴・埋土〕前述のごとく明確な施設は見られない。この竪穴は東・南側では

黒色土に掘り込まれ、埋土の黒褐色土にシルト質土が細かい塊で混在する。

〔遺物〕埋土北部には縄文片が含まれ床面上にまで見られる。これは遺構外南側包含層に密度の濃い部分があり構築時のまざれ込みや廃棄後の流れ込みと思われる。表に示すごとく土師器が大半で遺構外の出土物と接合するものもある。須恵器は1片のみである。7)は内黒の土師器環で、土師器甕には肩部に段や叩目を持つものがある。



第9図 第1号 (Bb06) 住居跡

- I—黒褐色 (Hue 5.5YR 5) 腐植土層 シルト質若干、炭化物若干、遺物含む
- II—黒 (Hue 7.5YR 5) 腐植土層 シルト質増す、炭化物、焼土塊若干、遺物含む
- III—暗褐色 (Hue 7.5YR 3) 腐植・シルト質層 炭化物若干含む

第7表	出土位置	形状	部位	色調	土質	内面(調整等)	外面(調整・施文等)	備考(単位cm)
第1号 06	1	Q ₁	鉢	体部	—	—	施文(一見)	施文11種、鎌形刺片あり、茶母含むものあり
	6	〃	口・体	鈍褐色	砂粒含	青	ロクロ	土師器、口唇外反1種7片
	10	〃	体部	—	—	—	—	〃 外反気味
	7	Q ₂	口	鈍褐色	砂粒含	青	ロクロ	〃 2種4片
	11	〃	体・底	—	—	—	—	土師器3種3片
	12	〃	体部	褐色	細砂	青	無で	印目(前縁)
	2	〃	鉢	〃	—	—	—	施文
	3	Q ₃	〃	〃	—	—	〃(L-Rもあり)	〃
	4	〃	〃	鈍褐色	茶母含	積	西黒処理	ロクロ
	8	〃	口・体	鈍褐色	茶母含	積	—	—
	13	〃	体部	—	—	—	—	—
	9	Q ₄	口・体	鈍褐色	砂粒含	青	ロクロ	ロクロ
	14	〃	口・体	—	—	—	—	〃 外反気味
	4	土層断面中	鉢	体部	—	—	—	—
	15	〃	鉢	〃	—	—	—	—
	5	床面上	鉢	〃	粗砂	積	粗孔目	印目附り
16	〃	鉢	〃	淡褐色	粗砂	青	無で	

第2号 (Ch62) 住居跡 (第10図)

〔遺構〕〔平面形・規模・カマド・方位〕一辺3.60mの方形である。残存壁高は0.1m内外では垂直に立ち上がる。中央やや南寄りに炉と思われる石組と焼土が検出されたが、焼土は0.5～1cmの薄さで、石の受熱による変色も著しくない。但し周囲には炭が散在している。

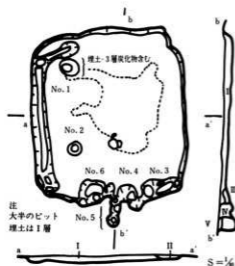
〔床面・周溝・柱穴・埋土〕貼り床等形跡は認められない。中央部及び北壁際に地山礫が露出する。西壁際から北壁際にかけて周溝状様施設が認められる。柱穴と思われる土壌は3ヶ所あり図の1)～3)である。他の土壌は他の施設のものと思われる。埋土は1層でシルト質土と腐植質土の混合層で、固められたように堅く締っていた。

〔その他の施設〕前述以外の土壌は3ヶ所である。4)は南壁をえぐる様に設けられている。5)は外側に3基連続して張り出している。全体的な配置からこの位置にはカマド等が設けられるのであるが前述の通りで、カマドを壊した痕跡すら認められない。いずれにしてもこれらの土壌の性格は明確に出来ない。作業仮説としては他の掘立柱の1つと考えられるものもある。

〔遺物〕鉄製品が2点出土した。1点は3)土壌に近い床面よりの刀子様鉄製品である。刃部と思われるが、厚く角鉤様でもある。3)土壌の北壁に貼り付いた形で鉄板様の出土物があるが、錆化によりその実体は不明である。

以上の事より明確な年代は不明であって今後の検討をまたねばならない。

- I—暗褐色 (7.5YR5) 腐植・シルト質層 (炭化物焼土若干含む)
 II—褐色 (7.5YR5) シルト質腐植土層 (炭化物若干含む、硬い)
 III— () シルト質土 (埋含む人為的埋土)
 IV—暗褐色 (7.5YR5) 腐植・シルト質層 (炭化物・焼土若干含む)
 V—褐色 (7.5YR5) シルト質腐植土層 ()



第10図 第2号 (Ch62) 住居跡

第3号 (Dc12) 住居跡 (第11図、第8表、第12図、写真6図)

〔遺構〕 [平面形・規模・カマド・方位] 一辺約3.60mの方形であるが、北壁東隅近くに長さ1.6m、奥行0.5mの張り出しがあり底面は幾分外側に高くなっている。残存壁高は約0.20m内外で、煙出し検出面高より推定される壁高は0.40m以上である。カマドは東壁南隅近くに設けられている。袖は石及び土器を芯としてシルト質土にて構築されている。支脚の石は東壁の線上に据えられてある。煙道は横抜き式で長さ1.40m、径0.18mである。煙道は煙出し部へと下降している。煙出し部に土師器裏体部が出土したが補強の為に使用されたと考えられる。北東隅の張り出しまで含めた長辺の方位はN12°Wである。

〔床面・周溝・柱穴・埋土〕 床面には、貼床・周溝・柱穴等の施設は見られない。南壁は礎石である。床面には土師器等の他に炭化材が多く埋積している。炭化材は、住居跡の中心に向かい放射状に倒れ込んでいる。北東隅及び西壁北隅近くには壁に沿って立っているものもある。炭化材上に地山質土(一見粉状バミス様の砂質土)が薄く介在するが東壁側はより厚い。埋土は全般的に極暗褐色を呈し、水の作用による酸化物を幾分含む。

〔遺物〕 完形での出土品はない。土器で口縁部より底部まで接合する破片でも、まとまって出土するものは少ない。床面にかなりの酸化鉄沈着現象が見られたが鉄製品は確認出来ない。**土師器**：環 1)は底部から口縁部まで一応まとまって出土した。表面に酸化鉄の付着物がある。碗形の片片で反転図化してある。2)・3)は同一個体と思われるもので、体部の立ち上り具合や、胎土及び内面の同心円状の凹み等酷似している。体部の立ち上がりがゆるく環形である。4)は内黒の小破片である。他に内黒片は見い出せない。：甕 1)はカマド袖南側より出土した底部から口縁まで接合するものであるが、カマド焼土中の口縁片が接合した。全体的に赤

第3号 (Dc12) 住居跡出土物	第8表		写真 番号	出土 位置	法 量 (g)			口縁部 形状	底部 形状	底面切 削法	胎土 含有物	調 整		発 見	備 考			
	図 番号	写 真 番号			口 径	底 径	器 高					外 面	内 面			片 長	片 厚	
土 器	1	12-1	6-1	床 面	(13.8)	(5.9)	(5.3)	外 環	平底	ロクロ	黒灰質	滑	ロクロ	ロクロ	酸化	赤褐色?、体部立ち上がり大		
	2	12-2	6-2	*		6.4	(5.5)	*	*	*	粗砂	*	*	*	*	*	内面:同心円線状	
	3	12-3	6-3	カマド北焼土	(15.0)			外 環	-	*	-	*	*	*	*	*	*	*, 2)と同一体部か?
	4	-	-	甕	(33.2)			*	-	*	-	細砂	*	*	内黒沈着	*	石瓦立つ、内黒は他にも1片	
	1	12-4	6-4	床面Q	16.7	6.6	15.4	外 環	平底 (ロクロ)	滑 見	細灰	*	*	網敷上げ	*	*	網敷上げ (カマド焼土内)	
	2	12-5	6-5	* 胎土	(23.0)	-	-	複 合	- (*)	-	粗砂	ロクロ粗り	ロクロ	ロクロ	*	*	口縁部破片、煙出し土器類似	
	3	12-6	6-6	焼土中	(20.4)	-	-	*	- (*)	-	石瓦	*	*	*	*	*	底口欠壊、底部折角り大	
	4	12-7	6-7	床 面		(7.4)		-	平底 (*)	(磨り)	細砂	粗り・粗目	滑上げ	*	*	*	薄手破片、口の胎土類似	
5	12-8	6-8	袖基部	(14.0)	-	-	外反欠壊	-	-	粗	*	* - 撫で	撫手で	*	*	歪み大、片口壊でもある		
6	12-9	6-9	甕	(不観)	-	-	(外環)	(ロクロ)	-	砂	*	*	*	*	*	幾分軟質、口の胎土類似		
7	-	6-10	床 面	(20.4)			複 合	- (*)	-	* 粗	ロクロ粗で	*	*	*	*	幾分軟質		
8	-	-	*	-	-	-	-	-	-	-	雲母 滑	滑	滑	滑	*	*	焼出し土器に類似	

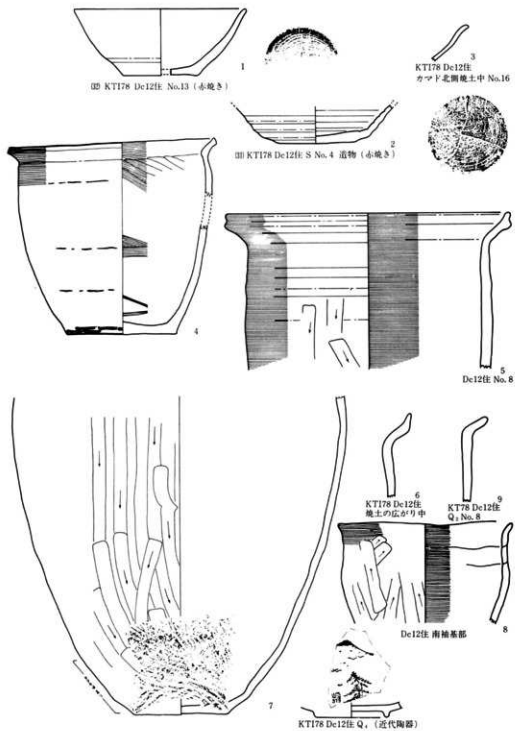


第II図 第3号 (Dc12) 住居跡

橙色を呈している。2)はカマド袖側の床面に貼り付いた形で出土した。類似片は、前述の煙出し壁近くに出土したものである。ロクロによる口縁部調整を行なっているが、厚ぼたく調整がなされ幾分古い時代の形態をしている。4)は底部より頸部近くまで接合した破片であるが、体部片は煙道より出土したものである。叩目が底部近くに残存しており、底体の境は明確でない。推定反転図化したもので、実際の底径及び胴径は図化値より幾分小さな細身の器形であるかもしれない。この4)の類似口縁片は3)と6)があるが特定は出来ない。5)は壁とカマド袖の境(基部)に貼り付いた形で出土したもののだが2)同様仕上げが粗末であり、出土状況との関係より住居に生活した人間が用器として使用したとは考え難い。

この他の出土物として縄文片がある。この縄文片は南東部埋土よりの出土で、地文のR-L上に横位の沈線が一本施こされている。住居廃棄後の埋入物と判断される。

炭化材の材質については節や炭化の具合より栗材であると鑑定結果が出ている。又 ^{14}C 測定による年代は $1170 \pm 60\text{y.B.P.}$ ($1130 \pm 55\text{y.B.P.}$) という結果が出ている。



第12図 第3号 (Dc12) 住居跡・出土遺物

第4号 (Ej15) 住居跡 (第13図、第9表、写真7図)

〔遺構〕〔平面形・規模・カマド・方位〕用地の事情にて半掘形であるが、南北長5m、東西長4m、壁高は0.20mである。カマドは東方壁中央よりやや南に構築されている。焚き口部には焼土と多くの石が散在している。袖は川原石を立て芯にし、上をシルト質土にて被い構築している。カマド基部と煙出し部に於いて繰抜き構造が認められる。カマド方位はN72°Eである。煙道は焚き口と煙出し中央を結ぶ線より幾分北に振れている。煙道と煙出し底はほぼ水平である。尚本遺構の検出位置はEi15であるが記載上Ej15としてある。

〔床面・周構・柱穴・埋土〕床面は粘質土で水はけは不良であるが周溝等の施設は検出出来なかった。北半の床面には炭化材が散乱している。この炭化材は柱または梁材と考えられるが、柱穴は検出出来なかった。埋土はカマド部を除いて2層である。上層は黒色腐植粘性土で下層はそれに地山成分を幾分含みほぼ水平に堆積している。カマド燃焼部埋土は上記の他に焼土混在層と焼土層である。

〔その他施設〕東壁北側隅には貯蔵穴様土壌がある。この中には炭化材数個と甕の破片が数片埋積していた。カマド南袖のすぐそばには同様の土壌があり、数片の土器片が埋入していた。この土壌の南側は、南壁の張り出し部となるが、入口としての機能を有したのだろうか。

〔遺物〕床面出土物でも東方、住居跡外の包含層出土物と接合するものがある。(第14図) 土師器：杯 1)はほぼ完形に復元出来た物である。実際は全体的に歪んでいる。片口様形態に近いと見る事も出来る。外面底部から口縁部にかけて墨痕と思われる部分がある。字の上に墨を塗り重ねて抹消したものか黒斑なのか不明である。2)は口縁部 $\frac{1}{2}$ を反転図化してある。口唇部の1部を僅かに窪ませ、片口として機能するように成型されたと思われる。墨書痕も認められる。3)は遺構外遺物と接合するが、土壌出土外反口縁部と同一個体と思われる。

：甕 1)は $\frac{1}{2}$ 程残存した物で、カマド周辺よりの出土である。弱く外反する口縁で、礫等含む土性上か、積上げ痕が剥離痕になっている。黒斑様の変色部が内外にある。調整等粗雑である。2)の形態は1)と同様整うが、調整等粗雑な遺物である。媒様付着物は底内部と口縁部内外に僅かに認められる。3)は床面南西部分に出土した。断口及び内面に炭質物が付着している。内彎口縁を有する。4)は小型で、口縁外面に横位沈線を施してある。5)は大型で、遺構外東方出土の2個体と同等の大きさである。

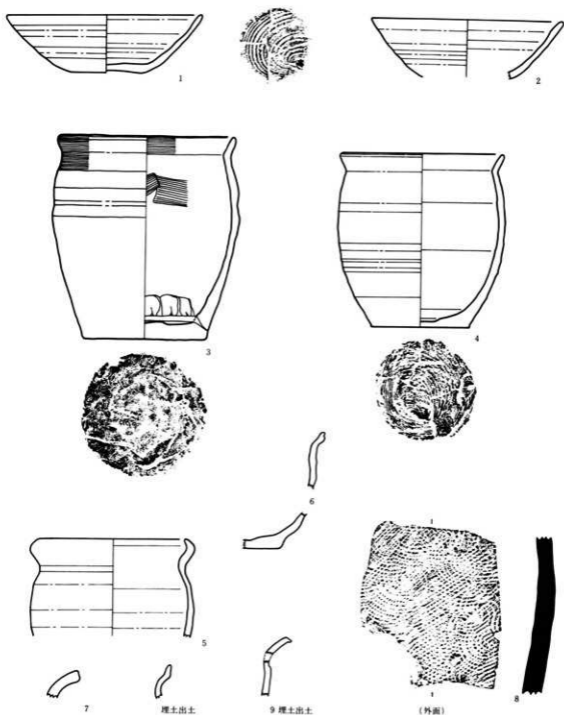
須恵器：甕 図示(8)と(10)の2種4片で、(8)は砂質が強い、又打工具痕と自然軸が認められる。(10)は削りと撫で痕が認められる。

炭化材はタモやミズキと種不明の針葉樹である。¹⁴C測定によれば1200±75yB.P.(1160±75yB.P.)と結果が出ている。



第13図 第4号 (E)15 住居跡

第9表		調査番号	写真番号	出土位置	重量 (g)	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	口縁部形状	底形	成形技法	表面施装	胎土	胎土含有物	断面	断面	断面	断面	備考		
第4号 (E)15 住居跡出土物	土	1	14-1	7-1	床面中央	13.6	5.0	4.0	外縁	平底	ロクロ	腐植土	砂質	管	ロクロ	ロクロ	磨化	管	(赤地?) 磨面、不整形		
		2	14-2	7-2	第1号土坑	13.3	—	—	*	—	—	—	*	*	*	*	*	*	*	1) に類似	
		3	—	7-10	床面	—	5.2	—	—	—	平底	*	腐植土	石灰	*	*	*	*	*	*	赤地砂質土、E)12Cと類似
		4	—	—	*	—	(5.8)	—	—	—	—	*	*	*	*	*	*	*	*	*	砂質、OeA, 1) に類似
	陶	1	14-3	7-3	カマ子中	12.4	8.4	14.2	外反	*	(ロクロ)	平焼	腐植	*	管で、肩付	腐植で細毛目	*	*	*	土質調査結果、図形参照	
		2	14-4	7-4	床面	11.5	6.8	12.1	外反突縁	*	ロクロ	腐植土	*	ロクロ	ロクロ	*	*	*	*	底内面に腐植付着物	
		3	14-5	7-5	*	10.1	—	—	内縁	—	—	—	石灰	*	*	*	*	*	*	灰質付着	
		4	14-6	7-6	*	11.2	5.0	—	(腹弁)	平底	—	—	管	*	*	*	*	*	*	*	
		5	14-7	7-7	*	(20.0)	—	—	腹弁	—	(ロクロ)	—	腐植	*	*	管で、細毛目	*	*	*	腐植付着物	



第14圖 第4号 (E115) 住居跡出土遺物

2) 竪穴状遺構 (第15図 写真7・8図)

(Ca62) 竪穴状遺構

〔遺構〕〔平面形・規模・その他〕輪郭が不整形をなす、一辺は約3.0m、南壁は新しい時代の小溝によって切られている。残存壁高は約12cmである。南東隅には張り出しを有するが、コマド及び煙道と見る事は難しい。埋土には礫が多く混在し、図のごとく細分出来るが黒色土の攪乱層と考えられる。中央南寄りの盤状の窪みは少量の焼土と炭を含む黒色土が埋入した浅いものである。(図示を省略したがこの遺構の南側及び東側は低く、特に南側は段状になっている。又南東隅に続く形で黒色土の落込みがあり、段状部が遺構側に削り込まれている。この落込みの南側は検出地山へと漸時薄くなり途切れ、削平等の経過が考えられる。更に南側にはCa62溝が東西方向に走っている。) 出土遺物は底面直上よりの土師器腰肩部と埋土よりの古銭である。土師片の断面より肩部有段、胴張りの器形が推定できる。外面篋撫で、削り、内面刷毛目の調整が施されている。遺構西壁の直ぐ外側には土師器腰木葉底片が出土している。

(Cd68) 竪穴状遺構

〔遺構〕〔平面形・規模・その他〕不整形で各辺は方位に平行の2m強の長さ、深さは約0.2mである。断面は皿状に近い。埋土は3層で底部に礫が混在している。特に他の施設はない。〔遺物〕埋土より磨滅した土師片が2点出土した。又スタンプ様土製品も出土している。

3) 焼土遺構 (第16図、写真8~10図)

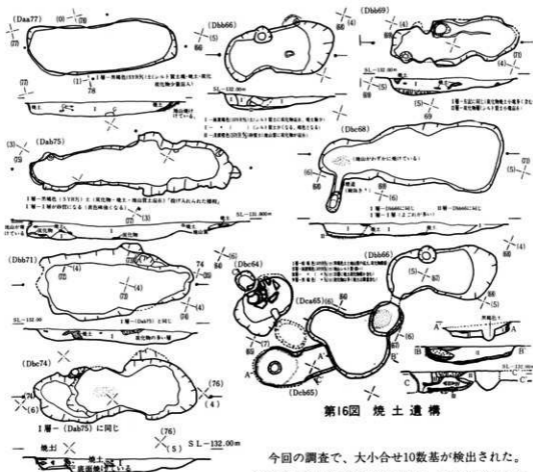


Ca62竪穴状遺構



Cd68竪穴状遺構

第15図



第16図 焼土遺構

今回の調査で、大小合せ10数基が検出された。
その内大きなものは10基である。これらは水田盛

土下基本層序第4層の黄橙色土にて検出されている。

(Daa77) 焼土遺構

〔遺構〕〔平面形・規模・その他〕長軸が94cm、短軸が64cmの楕円に近い形で、深さ約30cmである。短軸方向の西側に煙出し様の土壌をとまう。東西・北側の壁面が強く焼け、赤橙色を呈する。東側の壁は天井様に張り出している。煙出し様土壌とは縦抜き式で連続し、平らな石が敷き詰められた底部も良く焼けている。(尚、遺物は出土していない)

(Dab75) 焼土遺構 (Dab75, bb66・69・71, bc68-74, ca65, cb65) (第16図)

(Dbb66)遺構と同じように煙出部を持つものは (Dbb66) 遺構と (Dbc68) 遺構である。断面形はいずれも最奥部に向って下り、中央部はやや平坦である。最奥部は西側で、幾分の丸味を持ち上部に立ち上がるか、袋状天井の張り出しを持つ。残存部の深さは25cm内外である。埋土は焼土塊・炭化物等を含む暗褐色又は黒褐色土である。中央部から奥にかけての底部及び壁面は焼けており、炭化物も多い。出土物は二遺構よりの土師小片が2点のみである。

以上述べた状況よりこれらの遺構はカマド或いは竈として機能した可能性が考えられる。類似の例としては同町内柳田遺跡や県外では宮城県白石市松田遺跡の平安時代遺構がある。

4) 溝状遺構 (第17・18図、第10表、写真14～16図)

(Ag53) 溝

〔遺構〕〔規模・埋土・その他〕長さ約50m、巾0.60m、深さ0.1m内外のほぼ南北に走る溝である。(Ba03) 溝の東側をほぼ平行に走るが検出標高は北端ほど低い。埋土は溝の中央に腐植質が偏在する。底部側部とも地山に漸移する。この溝は(Cb77) 溝の上面をかすめる様に切り、現用水路と交わる形で延びたと考えられる。(Cb77) 溝との接点には西方より延びる2条の小溝が、又この小溝の延長方向には(Ce62) 溝がある。埋土には土師器数片が含まれている。

(Ba03) 溝

〔遺構〕〔規模・埋土・その他〕長さ約50m、巾最大約4m最小約1m、深さ約40cm、ほぼ南北に流れる現用水路に沿って延びる。南側Ce77付近で巾広く、小溝と重複する。埋土より小溝の方が新しいと考えられる。現用水路はCe80付近で東に方向を転じるが、この溝はほぼ直線的に南下し調査範囲外に延びる。埋土は上部より、開田工事による層、旧表土直下の層、砂質の水路底層(北部ほど厚い)、グライ化層で構成されている。地表の凹地に見られる黒色土は南側の巾広い部分にては中間層としてある。人為的に掘込まれた感じのもので、地山の傾斜に沿った形で存在する。Ce77付近の巾が広い所は水場として機能した可能性も考えられる。他の溝との関係は標高等より特に考えられない。

〔遺物〕南側の黒色土下、砂質部に多く、縄文片は黒色土(旧表土直下の層)に、土師・須恵片は砂質部に偏在している。2)は溝を被っていた包含層よりの出土で、明確に複合口縁が引き出されている。自然釉の部分は水による変質作用を受けてかオリブ色(黄～灰)を呈している。その他の部分は内外とも灰赤色(2.5YR5/6)を呈している。内面には笹葉様当工具痕が見られる。器壁は肩部にかけて薄い、それ以下は不明である。断口は褐灰色(10YR5/6)で焼締まった状態である。3)は1/2口縁片で、複合部はそれ程強調されていない。釉様の付着物は2)と同様変質し、口唇部5mm下より内頸部まで付着している。外面及び断口は2)の断口と同色で

第10表		図	写真	出土	法 量 寸			口縁部		成形		装飾		胎土		調 整		焼 成		備 考 () 補定値*
Ba03 溝出土物	1	番号	番号	位置	口径	直径	高さ	形 態	初期	成形	装飾	全物	外 面	内 面	長	厚				
			2	17-1	18-1	Bb50	(15.0)	5.9	(5.0)	—	字流	ロクロ	刷毛	襷	ロクロ	ロクロ	還元	青	内面に赤くす痕	
	3	17-2	18-2	C+77	(18.3)	—	—	覆合	—	ロクロ	—	襷	ロクロ・明日	ロクロ・明日	還元	青	自然釉、刷毛跡			
	4	17-3	18-3	F	(18.0)	—	—	×	—	—	—	刷毛	ロクロ	ロクロ	×	×	口縁内自然物			
	5	17-4	18-4	B(56)	—	(7.1)	—	—	字流	(ロクロ)	刷毛	襷	×	×	還元	×	〔中腹部〕黒色あり			
	6	17-5	18-5	B(56)	—	(11.2)	—	—	字流	(ロクロ)	刷毛	襷	×	×	還元	×	底面花柄模様			
	7	17-6	18-6	B(56)	—	(6.6)	—	—	字流	ロクロ	刷毛	襷	×	×	還元	×	物子収まり目			
	8	17-7	18-7	B(56)	—	—	—	—	—	—	—	襷	×	—	当て工具痕	還元	×	内腹中四角 硝石として使用		



第17回 溝出土物

S=1/2

内面は下部程黒味を増す。4)は頸部及び底部片で、直接接合しないが推定図を示した。ロクロ整形で、外面は灰褐色(5YR%)、内面は赤灰色(2.5YR%)、断口は鈍橙色(2.5YR%)、胴張りであるが器壁は薄く、所々に積上げ痕が認められる。5)は甕底部で、揚底の外面に篋様工具による花卉状文様が、糸底部には細い工具による撫で痕がある。内外及び胎土も褐灰色(10YR%)を呈する。6)はおろし皿と思われる陶器底部片で、軸も認められる。胎土分析結果は別記してある。7)は須恵器甕底部片を砥石として使用している。

(Cb77溝)

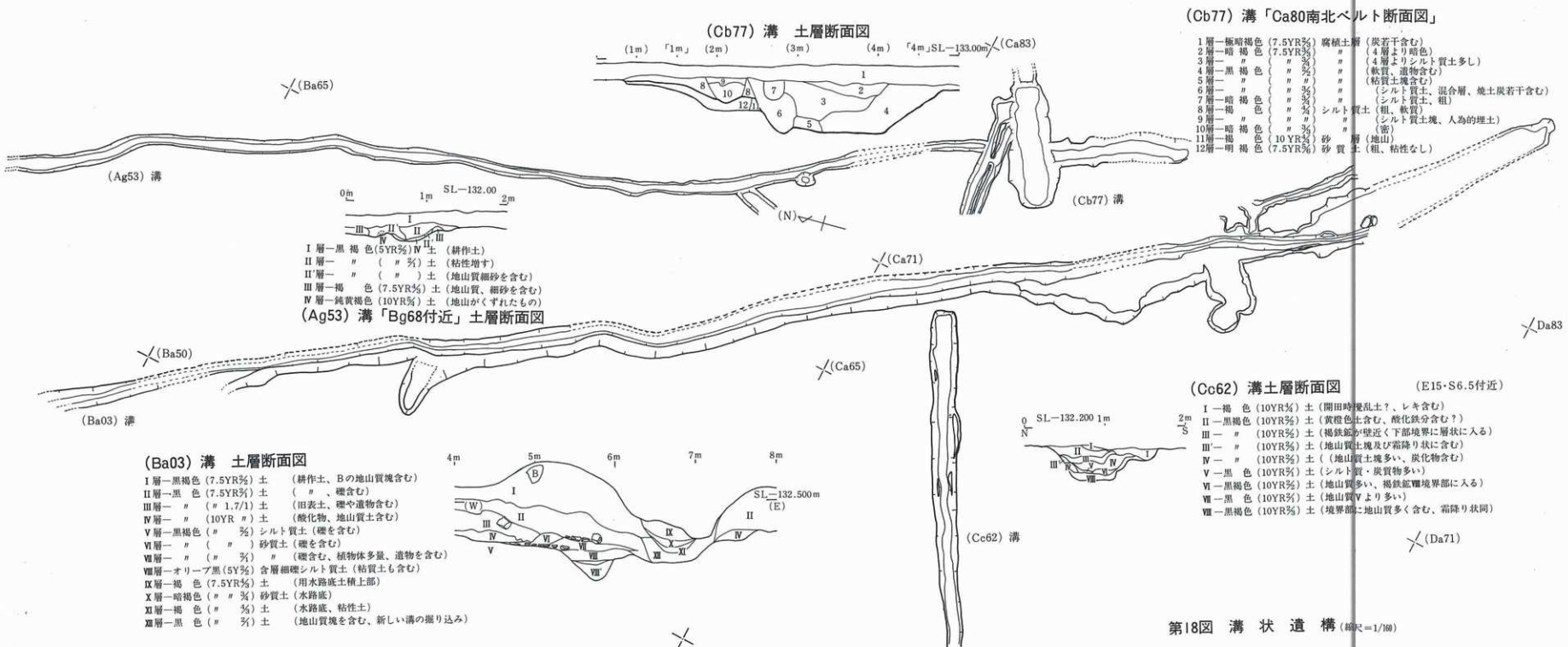
〔規模・埋土・遺物・その他〕長さ約6m、上端巾約2m、下端巾約1m、深さ約50cm、底部西側が低く、検出西端は閉じている。北東端は浅い溝と連らなっているが切合いの関係にも見える。いずれにしても単独で機能した可能性は考えられないがどの溝と関連があるのか不明である。埋土は黒褐色や暗褐色が大半を占め、北壁寄りには炭・焼土が、又酸化鉄の沈着も見られる。遺物は底部より、陶器底部片、須恵器片が出土した。陶器片は灰軸のかかった1/2底部片で、胎土色調は鈍黄橙(10YR%)、体下部に削り調整、底部は回転糸切の後削り調整が、施されている。胎土分析結果は別記の通りとなる。

(Cc62溝)

〔規模・埋土・その他〕長さ約16.50m、西側上端巾約70cm、下端巾50cm、東側上端巾約1.20m、下端巾80cm、深さ西側約15cm、東側35cmである。底面は東側に傾斜している。横断面は逆台形である。埋土は黒褐色土・黒色土を主体にし、若干のシルト・中礫もしくは細礫を含む層もあり、大半は自然堆積物と思われる。この溝の西端底面標高は高くなり、削平により消滅したと思われる。北側にある高低差50cmの平坦面も過去においてはもっと高かった可能性もあり、この溝と何らかの関係の有していたとも考えられる。特に(Ca62)竅穴状遺構の張り出し部及び、平坦部への削り込みはほぼこの溝に接する点、留意する必要がある。また、検出面におけるものではあるが、東端が閉じている点、溝の機能として特殊な形を考える必要がある。

5) 掘立柱様柱穴群について(第19、20図)

調査地D区の焼土遺構の西側に多く検出された。地形の状況・地質に応じた工事がなされ、土壌が設けられたと思われるが、D区の南西地区は同じような土壌が多数検出され、その柱間係を解明する上で多くの問題が残る。この事は調査時点よりの問題でもあり、大前提であるべき性格付にかかわるものであった。作業段階の仮説は調査の進行にともない変化し現在の形に至っている。いずれにしても調査事項に関して統一した記録を残す必要があり、その点におい



第18図 溝状遺構 (縮尺=1/100)

てこれら土壌の類型化を行い、記録を残した。それには、形態（平面形・断面形）埋土の状態に主眼を置き、それぞれの分類と組合せにおいて、以下の6型式の区分をもって対処した。

A型式—暗褐色（7.5YR $\frac{5}{2}$ ）腐植土1層のみで明褐色（7.5YR $\frac{5}{2}$ ）シルト質土をほとんど含まない。断面形は上端も下端もほぼ同径で深いものが多い。

B型式—暗褐色腐植土と黄橙色（7.5YR $\frac{5}{2}$ ）土の混土でしまりは悪い。黄橙色土は拡散して霜降り状に含まれる。断面形状はA型式に似ている。

C型式—暗褐色腐植土と黄橙色土の混土で非常にしまっている。A型式より上端・下端径は比較的大きく、浅い。（礫を含むものもある。）

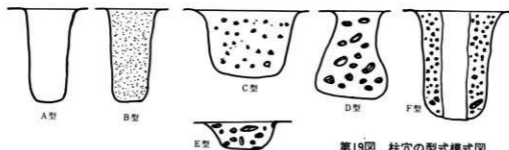
D型式—暗褐色腐植土に1～20cm径の礫を多量に含む。断面形は下方が広がるものが多い。

E型式—黒色（7.5YR $\frac{1}{2}$ ）・ないし黒褐色（7.5YR $\frac{2}{2}$ ）腐植土の中に砂粒や1～15cm径の礫を含み、比較的浅いものが多い。

F型式—掘方様の平面・断面形を持つ。中央の埋土はA型式、周りの埋土はC型式に類似し礫を含むものもある。

以上の類型において、多いものは、D型式・E型式のものであり、調査地D区の南西部に多い。この地区の検出面は基本層序8層に該当すると言っていい程上位層が薄い。（地形的に幾分傾斜し低いとは言え、下位の層が、他の層とはほぼ同一標高で確認されるのは、この8層が波打っているからである。）この地区においては検出面即生活面であった可能性も強く、柱を据える為の掘り方は下方が広がり、埋土に礫を多く含む事になる。E型式については部分的な削平が考えられるが、本来的な形態の場合は問題は残る。

次に配列状況とこれらの類型について関係を見ると特に強い結びつきは見られず、前述の様な地域的な制約によったのではないかとの見方が出来る。これら配列についての線引きは調査時の担当者が試案を作成し、結果としてほぼ同様に追認されたものである。それに従って考えられる建物の柱穴として調査時に明確に出来なかった物を含む事は今後の課題でもあるし、他にいずれの建物にも属さない柱穴様土壌（以下柱穴と記す）が存在する事も今後考慮する必要がある。現段階においては以下に示す6棟の建物が考えられる。

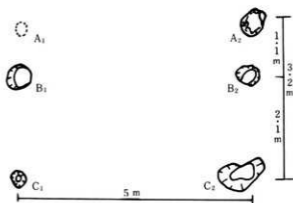


第19図 柱穴の型式模式図

〔第1 (Ci65) 建物〕 (第20図、第11表)

梁列方位は北より17°だけ西へ角度が偏っている。この建物は3.2×5.0mの広さである。この身舎の桁行は約5.0m、梁行は2.1m・1.1mと変則的である。廂が存在したとすれば北面の可能性が大である。北西隅は古代竪穴式住居跡にかかる。規模等から推定すれば、物置等の類のものであろう。時期についても不明である。

第11表	A ₁	B ₁	B ₂	C ₁	C ₂
上層跡 (m)	45	52	45		
下層跡 (m)	32	40	31		
溝 跡 (m)	34	35	31		
下層埋込 (m)	130.36	131.02	130.97		

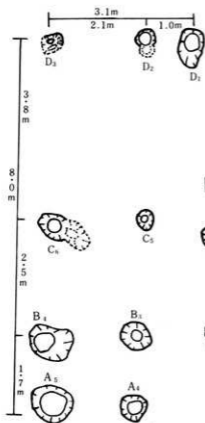


第20図 第1 (Ci65) 建物跡

〔第2 (Cj56) 建物〕 (第21図、第12表)

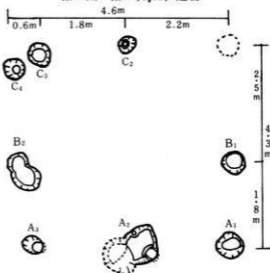
図、第12表)

梁列方位は西より24°だけ南へ



偏っている。曲り屋様の配列である。折曲部の柱穴の関係は不明である。西側部の桁行は南側より4.4m・3.6mとなるが梁行は東側より2.5m・1.8mとなる。東部の桁行は3.8mとなり、梁行は南側より1.0m・2.1mである。

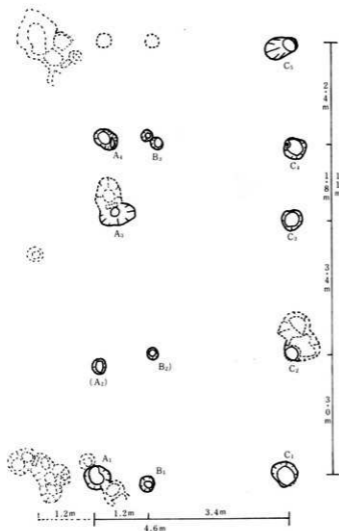
第21図 第2 (Cj56) 建物



第12表	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	A ₅	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	C ₁	C ₂	C ₃	C ₄	C ₅	D ₁	D ₂	D ₃
上端径 cm	52	23	37	53	85	45	(65)	—	80	33	45	44	38	80	—	42	—
下端径 cm	33	15	26	32	65	35	(45)	—	45	10	30	16	15	28	—	30	—
深さ cm	67	25	34	41	30	38	36	—	52	37	55	42	21	39	—	40	—
下端標高m	131.32	131.72	131.66	131.62	131.39	131.44	131.61	—	131.48	131.52	131.41	131.55	131.67	131.51	—	131.98	—

〔第3 (Da53) 建物〕 (第22図、第13表)

梁列方位は西より29°南へ偏っている。広さは4.6×11m²である。桁行は北側より2.4m、1.8m、3.4m、3.0mである。梁行は3.4m、1.2mである。この建物の西側の部分は奥行が小さい。試案の段階にては、西側に1間又は廂の存在を想定し線引きして見たがこれらについても明確に把握できない。



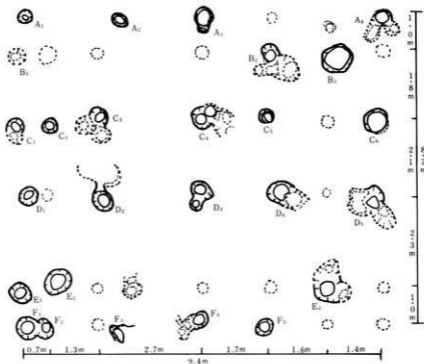
第22図 第3 (Da53) 建物

第13表	上端径 cm	下端径 cm	深さ cm	下端標高 m
A ₁	60	40	39	131.69
A ₂	37	25	26	131.78
A ₃	80	22	48	131.54
A ₄	51	33	45	131.76
B ₁	39	20	25	131.83
B ₂	—	—	—	—
B ₃	32	25	42	131.80
C ₁	57	45	81	131.19
C ₂	38	30	65	131.32
C ₃	48	40	24	131.81
C ₄	50	40	24	131.81
C ₅	65	30	66	131.61

〔第4 (De53) 建物〕 (第23図、第14表)

梁列方位は北より30°西へ偏っている。8.2×9.4mの広さであるが、間数の多い建物である可能性も大である。(但し間柱の不明な数も多いが。) 南・北・西にそれぞれ廂の存在も考えられるが、身舎同様不明な柱穴が多く又、他の三つの建物と切り合い関係にもあるので問題点は多い。身舎桁行は東より1.4m・1.6m・1.7m・2.7m・1.3mである。梁行は2.3m・2.1m・1.8mである。南側の廂は梁行が1.0m、西側の廂梁行0.7m、北側の廂梁行1.0mとなる。廂部分の未検出柱穴は南側3、北側2である。身舎部の未検出柱穴は、南側6柱穴中の4柱穴と半分以上で、北側も同様に4柱穴でしかも隅を欠いている。前述の様に当調査地に於ける内では規模も大きく、又切合い重複の関係にあり課題も多く残る。

第14表	A ₁	A ₂	A ₃	3-A ₃	3-B ₁	A ₄	B ₁	B ₂	B ₃	C ₁	C ₂	C ₃	C ₄	C ₅
上端径 cm	36	36	47	37	—	45	45	45	75	44	40	50	47	40
下端径 cm	15	24	38	25	—	32	22	33	57	24	25	26	26	20
深さ cm	25	24	40	26	—	32	36	38	20	27	32	38	38	59
下層積高 m	131.99	131.99	131.55	131.78	—	131.74	131.77	131.75	131.89	131.94	131.86	131.72	131.74	131.91
	C ₄	D ₁	D ₂	(D ₃)	D ₄	D ₅	E ₁	E ₂	E ₃	F ₁	F ₂	F ₃	F ₄	F ₅
上端径 cm	63	47	55	55	60	(55)	53	65	(70)	57	47	57	47	45
下端径 cm	56	(25)	32	32	40	(30)	29	40	37	32	23	44	29	27
深さ cm	70	12	31	39	41	68	29	50	61	27	24	36	29	25
下層積高 m	131.25	132.00	131.67	131.71	131.68	131.31	131.77	131.59	131.39	131.78	131.78	131.74	131.88	131.76

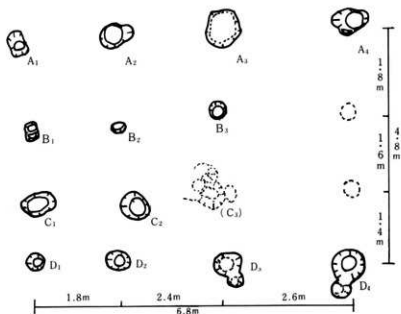


第23図 第4 (De53) 建物

〔第5 (Dc56) 建物〕 (第24図、第15表)

梁列方位は北より 16° 東へ偏っている。広さは $4.8\text{m} \times 6.8\text{m}$ である。桁行は東より $2.6\text{m} \cdot 2.4\text{m} \cdot 1.8\text{m}$ で、梁行は南より $1.4\text{m} \cdot 1.6\text{m} \cdot 1.8\text{m}$ である。北側と西側柱穴列が基準となり考えられた。東辺及び隅の柱穴は未検出で、南辺は後述の第6建物との関係より属性が明確でない。西側はほぼ等間であるが、東程細長くなる。(4-B₃)と表示した柱穴は第4建物と重複しているが中心はこの建物に沿っている。C₂・C₃は柱穴列から幾分離れすぎた物である。重複した物は他に(4-D₃)・D₄(6-A₃)がある。A₄から出土の古銭は、他の出土物と共に26図に示してある。

第15表	A ₁	A ₂	(4-B ₁)	A ₃	B ₁	B ₂	B ₃	C ₁	(C ₂)	(C ₃)	D ₁	D ₂	(4-D ₁)	D ₃
上端径 cm	35	(50)	75	30	26	27	38	(63)	57	55	35	45	55	70
下端径 cm	21	40	57	21	17	17	21	(37)	35	(30)	20	24	32	30
深さ cm	37	59	20	18	51	29	36	24	70	30	32	33	39	34
下端標高 m	131.68	131.51	131.89	131.82	131.68	131.84	131.74	131.95	131.41	131.83	131.86	131.85	131.71	131.68



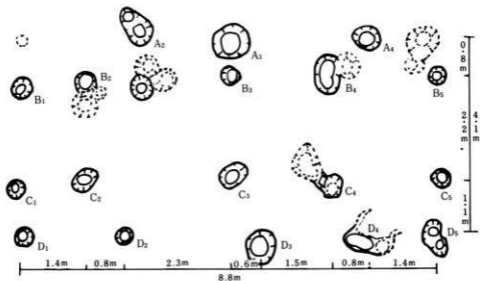
第24図 第5 (Dc56) 建物

〔第6 (De53) 建物〕 (第25図、第16表)

梁列方位は第5建物と同じである。広さは $4.1\text{m} \times 8.8\text{m}$ である。柱穴配置として、四面廂とした場合は東側に特異な形の廂を考えなければならない。身舎部分の桁行は東から $2.1\text{m} \cdot 3.1\text{m}$ で、梁行は 2.2m である。東側の廂は北より $0.8\text{m} \cdot 2.2\text{m} \cdot 1.1\text{m}$ 、南側は東より $1.4\text{m} \cdot 2.3\text{m} \cdot 2.9\text{m} \cdot (2.2\text{m})$ 、北側は東より $1.4\text{m} \cdot 2.8\text{m} \cdot 2.0\text{m} \cdot (2.5\text{m})$ となるが、()の値はそれぞれの

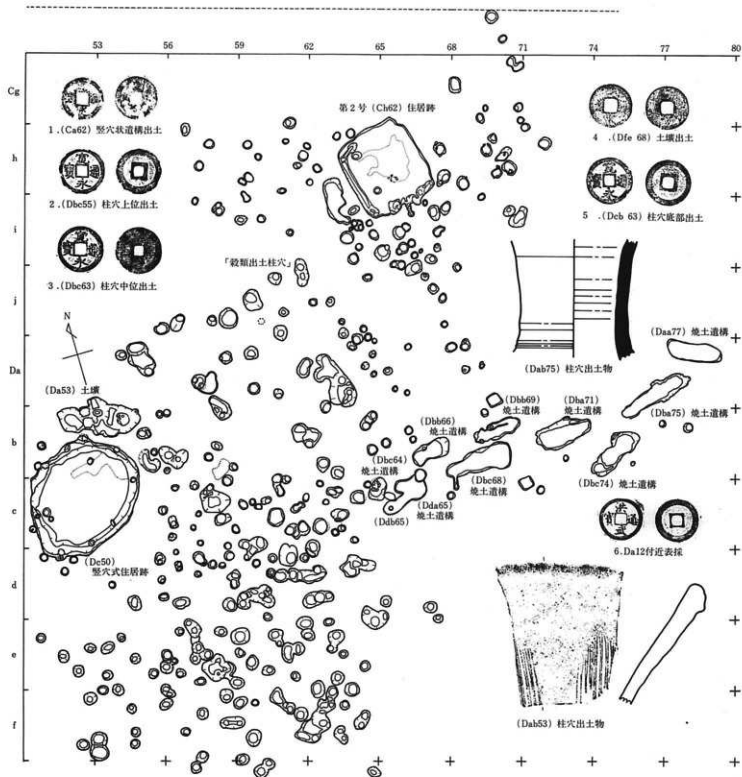
端における廂桁巾と言えないものである。以上は検出柱穴をすべてあてはめたものであるが、検出不能な物は北西隅であった。西廂の梁行が東のそれと同じ場合は、更に2柱穴が未検出だった事になるが東側にも同様な事が言える。南廂と北廂の柱穴が対称形に配置されたとすれば更にD₂に対応する物が必要である。この場合新たにA₂までの間隔が問題となる。重複した柱穴は(5-D₄)(4-F₃)である。

第16表	A ₂	A ₃	A ₄	(5-D ₄)	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	B ₅	C ₁
上端径 cm	(55)	75	50	70	45	45	40	(50)	35	37
下端径 cm	(25)	43	30	30	22	32	25	(24)	20	18
深さ cm	41	18	41	34	36	29	20	25	11	27
下端標高m	131.77	131.98	131.63	131.68	131.77	131.89	132.00	131.83	131.92	131.91
	C ₂	C ₃	C ₄	C ₅	D ₁	D ₂	D ₃	(4-F ₃)	D ₅	
上端径 cm	50	(52)	(50)	38	40	37	65	57	47	
下端径 cm	26	30	25	23	20	24	40	44	20	
深さ cm	45	37	42	26	36	44	50	36	34	
下端標高m	131.74	131.76	131.71	131.78	131.77	131.77	131.59	131.74	131.72	



第25図 第6 (De53) 建物

番号	名称	出土位置	外径mm	内径mm	内径mm	外径mm	重量	備考(内径の内径・厚はmm, 重量はg)	図番号	写真番号	
1	寛永通宝	Ca62南東平み	22.6	約17.4	約8	6.4	約1.4	1.6	一部欠損 全体に錆多く不明	26-1	-
2	"	Dhe55pit(上)	24.3	19.9	6.95	5.5	1.25	2.8	古寛永、無背、外縁欠損	26-2	17図
3	"	Dhe63pit(中)	24.65	19.8	6.9	5.3	1.2	3.1	古寛永、無背、外縁一部欠損、裏面摩滅	26-3	"
4	"	Deh63pit(裏面)	24.2	19.5	7.4	6.2	1.1	2.2	古寛永、無背	26-5	"
5	不明	Dhe68土塊	23.1	測定不能	7		約1	1.7	摩滅と錆がひどく不明	26-4	"
6	洪武通宝	Dh12付近表裏	22.9	18.9	6.7	5.8	1.5	3.2	明銭(1368年初鑄)	26-6	"



第26図 C-D地区柱穴様土壌群及U遺構配置 出土遺物

V まとめ及び今後の課題

本調査地において縄文時代の遺構と思われる竪穴や遺物が認められ更には古代の住居跡・溝、近世の掘立柱建物跡等が認められた。

縄文時代の時期を明確に示すものは、第一号土壌(Db53-1)出土物1)の土器口縁片である。これは既述の通り耳状の把手様装飾を施されたもので、岩手県滝沢村卯遠坂遺跡にて縄文時代後期初頭とされた物に類似している。同様の物は北上市更木遺跡にも出土例がある。

古代の住居跡として明確な、第三号(Dc12)住居跡・第四号(Ej15)住居跡は東向きのカマドを持ち、ロクロの技法を示す土師器を出土している。この2住居跡には火災等の原因で残存したと思われる炭化材がありそれぞれの¹⁴C測定結果は「第三号住居跡-1170±60yB.P.(1130±55yB.P.)、第四号住居跡-1200±75yB.P.(1160±75yB.P.)」と出ている。ロクロ技法の新しさと¹⁴C測定結果を考え合せ、平安時代の遺構である事は断言出来る。遺跡の北方には上平沢新田遺跡があり平安時代集落が確認されているが、ここに於いても住居跡構造を示唆する炭化材・壁材までが残存している点等、廃棄原因の共通性の有無の問題等今後に残される課題は多い。

中世の時期の遺構として明言出来るものはない。遺物としては表土よりの出土であったが、天目茶碗があった。これの産地・時代について現在未確定である。灰陶陶器底部を出土した(Cb77)溝及び卸し皿を出土した(Ba03)溝の遺物における下限を考えた際、中世遺構の存在した可能性は充分に残ると思われる。

近世以降の遺構として掘立柱建物跡が考えられる。これらは柱穴様土壌検出の後、その配列等考慮しながら発掘したが最終的(現段階における)には、複雑な重複を見せる建物の図上復元結果が前項にて述べられた。これら建物の間取り等今後の課題として残る。近世以降としたのは柱穴中に寛永通宝の出土を見た事による。しかし柱穴様土壌について再検討した場合、近世以前の物が明らかになる可能性もあろう。それらの点、調査時の反省も含め今後の課題としたい。尚、(Cja60)柱穴様土壌よりアズキ・コメ・オオムギ等の穀物炭化物が百数十粒出土した事を付記しておく。

以上の様な調査結果より遺跡の性格として、縄文時代より現代まで、途中空白の期間があるが、人間の生活の場として本調査地域が存在した事がいえる。遺跡の空間としての広がりや調査地区の西側及び南北方向への伸びが考えられる。特に西側には平安時代住居跡の存在の可能性が甚だ大である。

〈参考文献〉

(自然科学関係)

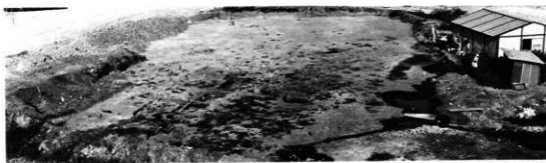
- 中川 ほか 北上川中流沿岸の第4系及び地形(地史) 地質学雑誌第69巻 812号 1963. 5
日本地質学会第80年総会見学旅行2資料 北上川低地帯の鮮新統第四系地形 1973
- 佐藤二郎 考古学のための地質学—岩手県文化課における講演資料— 1978. 8
- 町田 洋 火山灰 岩手県(財)埋蔵文化財センター主催講演会資料 1979. 6
- 井上克弘) 東北地方における奈良—平安時代遺跡埋土中の粉状バミスについて
山田一郎) —岩手県教育委員会文化課依頼分析結果より 1981. 11. 24
考古学と自然科学 第1号—第10号
- 町田 洋ほか 日本海を渡ってきたテフラ—科学vol.51 No.9 1981. 9
- 三辻利一 土器の産地 —科学朝日—6月号— 1981. 6
- 岩手県農政部 土地分類基本調査 日誌(1/5万) 国土調査 1974
北上山系開発室
- (縄文時代以降関係)
- 今村啓爾 縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較、物質文化No27
- 宮沢、今井 縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題—いわゆる落し穴について—
1976
調査研究集録第1集 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 霧ヶ丘調査団 霧ヶ丘 1973
- 岩手県教委 岩手県文化財調査報告書 第31・32・52・53・54・57集
日本道路公団 本調査関連報告書 I・II・III・IV・V・VIII 1979—1981. 3
- 岩手県教委・国鉄 第48集東北新幹線関係報告書IV宮地遺跡 1980
- 岩手県(財)埋文センター— 岩手県(財)埋文センター報告書第13集 繫III遺跡 建設省御所ダム事務所
県 土 木 部
- 北上市史編纂委員会「北上市史 原始—古代」北上市史刊行会
- 青森県教委 青森県文化財調査報告書 第37集 青森市内三内遺跡 1978. 3
- 岩手県教委 「岩手の古民家」(佐藤 巧) 1978



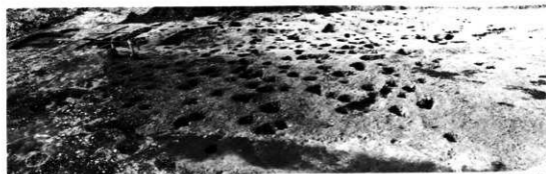
ABC区全景（西より）



C区全景（西より）



D区全景（西より）



D区全景（南より）

第1図 遺跡全景



D区(D・C50
以東柱穴様土壙)

第2図
D・E区
全景

D区焼土遺構全景



E区全景(西より)



D・E区全景(北東より)

